

オホーツク海

1月。オホーツク海。今年も海が真っ白な氷に埋め尽くされ、漁港を中心に発展した町は、少しの間だけ、大雪原にぽつんと置かれた内陸の町になる。波の音もなく、港に水揚げのにぎわいもない。

現代に生きる私たちにさえ過酷な、この「氷の海」には、かつて豊かな先史文化の世界が広がっていた。オホーツク海に生まれた先史文化の視点からアイヌ文化の成り立ちを考えてみたい。

枝幸地方のオホーツク文化

枝幸町は、北海道の北部、オホーツク海に面した宗谷管内にある。かつては道南の江差町と区別するため、旧国名を冠して「北見^{きたみえさし}枝幸」と呼ばれていた^{※1}。オホーツク海に沿って約60kmにおよぶ海岸線には「オホーツク文化」と呼ばれる海洋狩猟民の遺跡が点々と残されている。

オホーツク文化は、アイヌ文化よりも前に北海道に生まれた先史文化の一つだ。本州で古墳時代が終わりを告げる頃、大陸にルーツをもつ集団が、宗谷海峡の周辺で暮らしていた集団と接触することで誕生したといわれている。オホーツク文化のごく初期の遺跡はサハリンの南部から宗谷地方の北部にかけて広がっている。オホーツク文化は、宗谷海峡という「海」で生まれた文化なのだ。

オホーツク文化の後半にあたる8世紀ころ、枝幸地方では「目梨泊^{めなしどまりいせき}遺跡」という大きな集落遺跡が誕生する。この遺跡はオホーツク海に突き出した「神威岬^{かむいみさき}」を望む大きな湾の中につくられており、十数軒の住居跡と50基を超える墓が見つかっている。



流水寄せる真冬の神威岬

※1 北見国は現在の網走地方と宗谷地方の大半をその範囲としている。枝幸町にはかつて国鉄北見枝幸駅など「北見」を冠した名称が多く見られた。現在でも「北見幌別川」などにその名残を留める。



生活の基盤「オホーツク海」

目梨泊遺跡からは、海を暮らしの基盤とした人々の使った生活道具が見つかった。また、彼らの住居の近くからは様々な魚や動物の骨が発掘されている。サケやマス、カレイ、オヒョウ、ニシンにカジカ、はてはチョウザメやイトウなど、魚種の多様さは彼らが優れた「漁師」だったことの証だ。また、アザラシやトド、クジラなど海の動物を狩ることに彼らは秀でていた。海獣の肉は食糧に、脂は燃料に、骨は骨角器に、毛皮は衣服や交易品として活用された。

一方、彼らの住居を発掘すると、そのもっとも奥まった部分からヒグマの頭蓋骨が出てくる。クマを神聖な存在として大切に^{まつ}祀っていたようだ。

クマを祀る文化は北方の狩猟民に多く見られるが、のちのアイヌ文化の重要な要素となる「クマ祭り」の源流をオホーツク文化に求める考え方も根強い。

※2 右代啓視・小林幸雄・山田悟郎・小林孝二・為岡進・水島未記、1998；枝幸町ウバトマナイチャシ第1次発掘調査概報。北の文化交流史研究事業中間報告。北海道開拓記念館
右代啓視・小林幸雄・山田悟郎・村上孝一・為岡進、2000；枝幸町ウバトマナイチャシ第2次発掘調査概報。北海道開拓記念館調査報告39。北海道開拓記念館

に生きた人々

高島 孝宗 (たかほたけ たかむね)

枝幸町教育委員会事務局社会教育グループ
オホーツクミュージアムえさし館長

1973年 北海道夕張市生まれ。96年筑波大学第一学群人文学類卒業後、枝幸町教育委員会学芸員として採用され、町内の遺跡発掘や文化財保護に携わる。99年オホーツクミュージアムえさし開館により同館学芸員。2013年同館館長、ミュージアム改修計画に携わり、16年リニューアルオープン。研究分野はオホーツク文化の墓制や交易、枝幸地方の近代史など。

交易港から「聖地」へ

オホーツク人が生きた時代は、「国家」の時代でもある。大陸では隋・唐といった大帝國が北東アジアへと勢力を広げ、本州では統一国家「日本」が呱呱の産声を上げていた。

目梨泊遺跡からは、大陸に由来する装飾品や武器とともに、6振もの「蕨手刀」が見つかった。蕨手刀は奈良時代の東北地方で生産された直刀で、いわゆる「蝦夷の刀」とされる。オホーツク文化の「宝」は、8世紀を境にして大陸製品から本州製品へと変化しており、目梨泊遺跡は、本州との交易によって栄えた「港」だった。

目梨泊遺跡では9世紀を最後に刀を副葬する墓の構築が途絶え、やがて集落そのものが放棄される。オホーツク文化はアイヌ文化の母体となった「擦文文化」に吸収され、消滅したと考えられる。

その後、目梨泊はアイヌ文化の時代になって再び「チャシ」として活用されるようになる。チャシは砦

であるとともに、儀礼の場、見張りの場でもある。平成9年から11年にかけて北海道開拓記念館（現：北海道博物館）が行った「ウバトマナイチャシ」の発掘調査の結果、チャシを守る「濠」の内部に土塁が築かれ、柵が巡らされた本格的な防御施設になっていたことが分かった^{※2}。アイヌ文化の人々にとっても、目梨泊は守るべき重要な拠点であり続けたのだ。

また、幕末にこの地を訪れた松浦武二郎^{※3}は、交通の難所として知られた神威岬を過ぎるとき、土地のアイヌ民族がこの地に「神霊が宿る」として大切に敬い、イナウを捧げたことを記録している^{※4}。積丹半島の神威岬や旭川市の神居古潭など、道内には「カムイ」を冠する地名が点在しているが、その多くはアイヌ民族にとって「神聖な場所」として扱われている^{※5}。

オホーツク人が目梨泊を交易の拠点としたのは、ランドマークとしての神威岬の存在が大きな理由だろう。あるいは単調なオホーツク海の海岸線を打ち破る神威岬の威容が彼らを引き付けたのかもしれない。

やがて、そこはアイヌ民族にとっての「聖地」として受け継がれた。オホーツク文化とアイヌ文化、同じオホーツク海に臨む地に生きた二つの狩猟民は、ともに神威岬を「特別な場所」として意識していた。

オホーツク海に生きた人々

オホーツク文化とアイヌ文化との連続性を検証することは難しい。だが、少なくとも精神文化の面で両者は共通する価値観をもっていたと思う。それは、北海道の基層文化を形成し、現代につながっているのではないか。北海道の歴史の中で、オホーツク海に生きた人々の果たした役割は決して小さくない。



神威岬と目梨泊遺跡

※3 松浦武二郎 (1818-1888) 江戸末期の探検家。蝦夷地に関心を持ち、しばしば訪れて多数の紀行文や地図を残した。

※4 松浦武二郎・秋葉実解説, 1988; 武二郎蝦夷地紀行. 北海道出版企画センター

※5 枝幸町と浜頓別町の境に位置する神威岬(カムイ・エトウ)は、2010年に、アイヌ語で「美しい・形」を意味する「ピリカ・ノカ」の一つとして、国名勝に指定された。